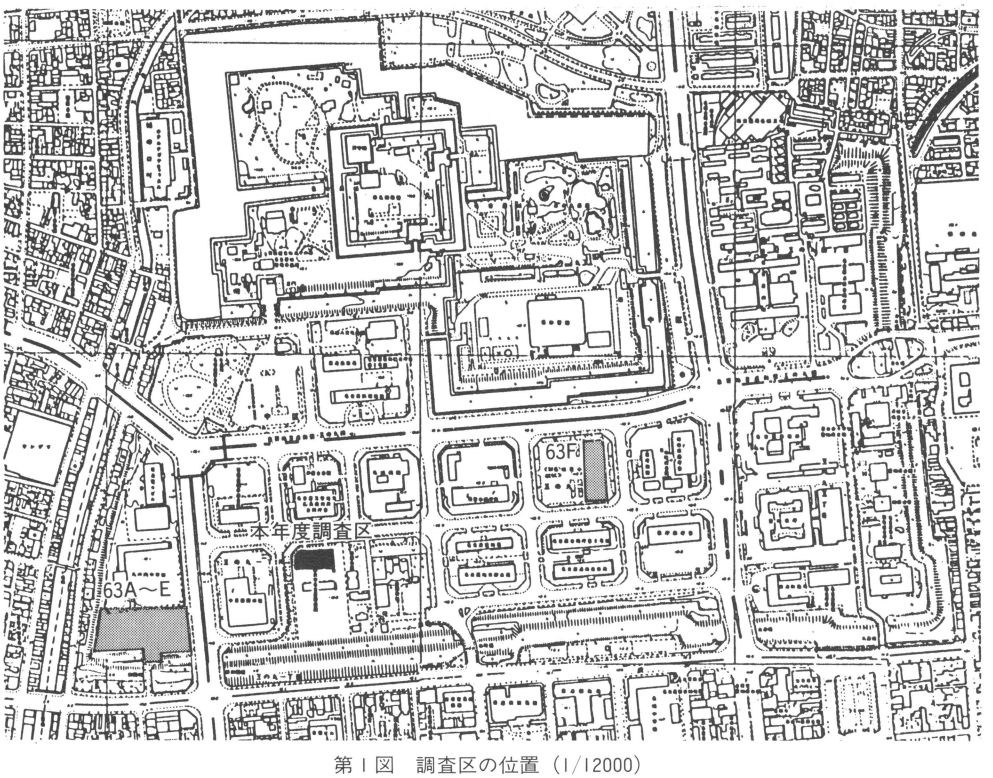
名古屋城三の丸遺跡

調査の経過

立地と沿革

名古屋の近世を象徴する「名古屋城」は、徳川御三家の筆頭、尾張徳川家62万石の居城として造営されたものであり、名古屋台地の西北端部に位置する。城の縄張りは台地端に占地する本丸を最高所とし、南西に西の丸、南東に二の丸を配し、さらにその南から東にかけて三の丸が設けられ、外堀で囲まれている。その外堀一帯に囲まれた中区三の丸は、現在では官庁と公共施設の街となっており、その標高は13m程を測る。

三の丸一帯では、すでに平安時代末頃に、藤原氏一族の荘園としての「那古野庄」の名が文献にみられ、戦国時代には、織田信長の生誕地ともいわれる「那古野城」が、今川氏親の手によって築かれた。さらに名古屋城築城後は、成瀬氏、竹腰氏ら尾張藩の重臣達の上屋敷が立ち並ぶ武家屋敷地を形成していた。また、昭和63年度調査の63A～E区では、弥生～古墳時代の遺構・遺物が確認され、三の丸遺跡が単に近世のみならず、これらの時代を通じた遺跡であることが明確となった。　（日比　宰）



第1図　調査区の位置（1/12000）

調査の概要

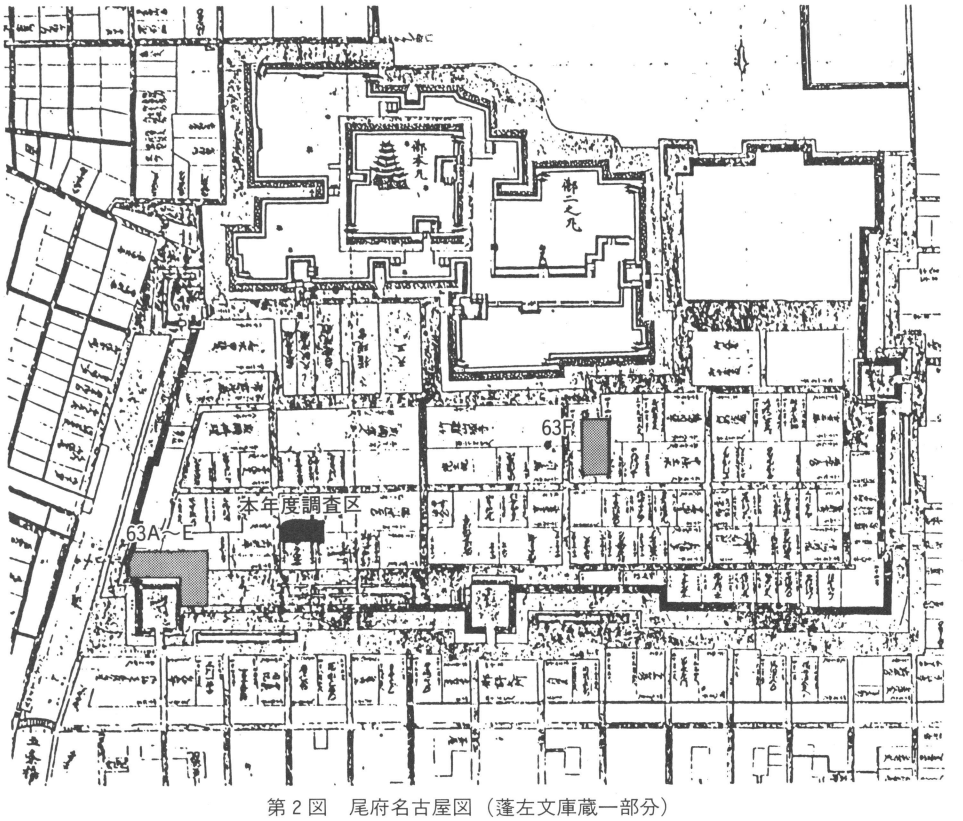
昭和63年度の調査は、市立丸の内中学校に南接する愛知県新文化会館（新図書館）建設用地（A～E区）及び名城東小公園内の名古屋第一地方合同庁舎建設用地（F区）の2地点について実施した。

平成2年度の調査は、税務大学校跡地の名古屋家庭・簡易裁判所合同庁舎建設用地2,800㎡について実施した。

前回の調査で確認された遺構・遺物は、Ⅰ期（弥生～古墳時代）、Ⅱ期（奈良～平安時代）、Ⅲ期（室町～安土・桃山時代）、Ⅳ期（江戸時代）の四時期に大別することができた。今回の調査も同様の時期区分が想定できる。以下、Ⅳ期の遺構・遺物について述べる。

今回の調査で検出した遺構は、柱穴・井戸・溝・地下室・廃棄土坑である。調査区は、幕末時の成瀬氏・鏡島氏・天野氏・中西氏の屋敷にかかっており、遺構は各屋敷に伴うものである。また、廃棄土坑等からは膨大な量の陶磁器類の遺物が出土した。尾張藩の重臣達の上屋敷であった「名古屋城三の丸」を解明する上で、貴重な資料となるであろう。

（鷲見　豊）



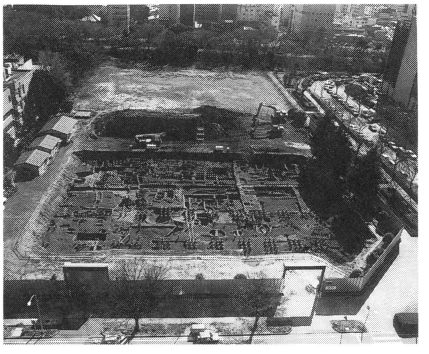
第2図　尾府名古屋図（蓬左文庫蔵一部分）

遺構　ここでは、調査の大半を占めるⅣ期の遺構について概要を述べていきたい。今回の調査では、第2図のように面積の多寡はあるものの4軒の屋敷地（1～4）が調査区内に含まれており、屋敷境いの溝、柵列、廃棄土坑、地下室等が確認されている。

まず、これら4軒の屋敷地の境界を成す施設については、溝と塀の存在が想定できる。溝は、ＳＤ04、16等が該当するものと考えられるが、ＳＤ04は幅1.2m、深さ1.9m、ＳＤ16は幅1m、深さ1.6mのともに箱掘りの溝で、幅に比して非常に深いのが特徴である。ＳＤ04は、出土遺物から17世紀前半のものと考えられ、三の丸造成当初は隣家との境界を明確に意識していたことが窺われる。また、溝のあり方が宝永6年（1709）の『尾府名古屋図』の屋敷割りと合致することは注目に値しよう。塀については、ＳＡ03、ＳＤ03が、その基礎に比定され得るが、溝が埋った後、その上に築かれていることから、溝に比べ、境界に対する意識の一歩後退した形として捉えることができよう。なお、溝と塀の共存、及び境界部分における路地等の存在は、今後の重要な検討課題の1つであろう。

次に廃棄土坑は、大小様々な形態のものが調査区全域に分布しているが、大概、5つのグループ（Ａ～Ｅ）に大別できるようである。それぞれ、境界溝に沿う形で、屋敷地のコーナー部分に集中しており、建物の裏手、裏庭等に繰り返し掘削、投棄していたことが窺われる。

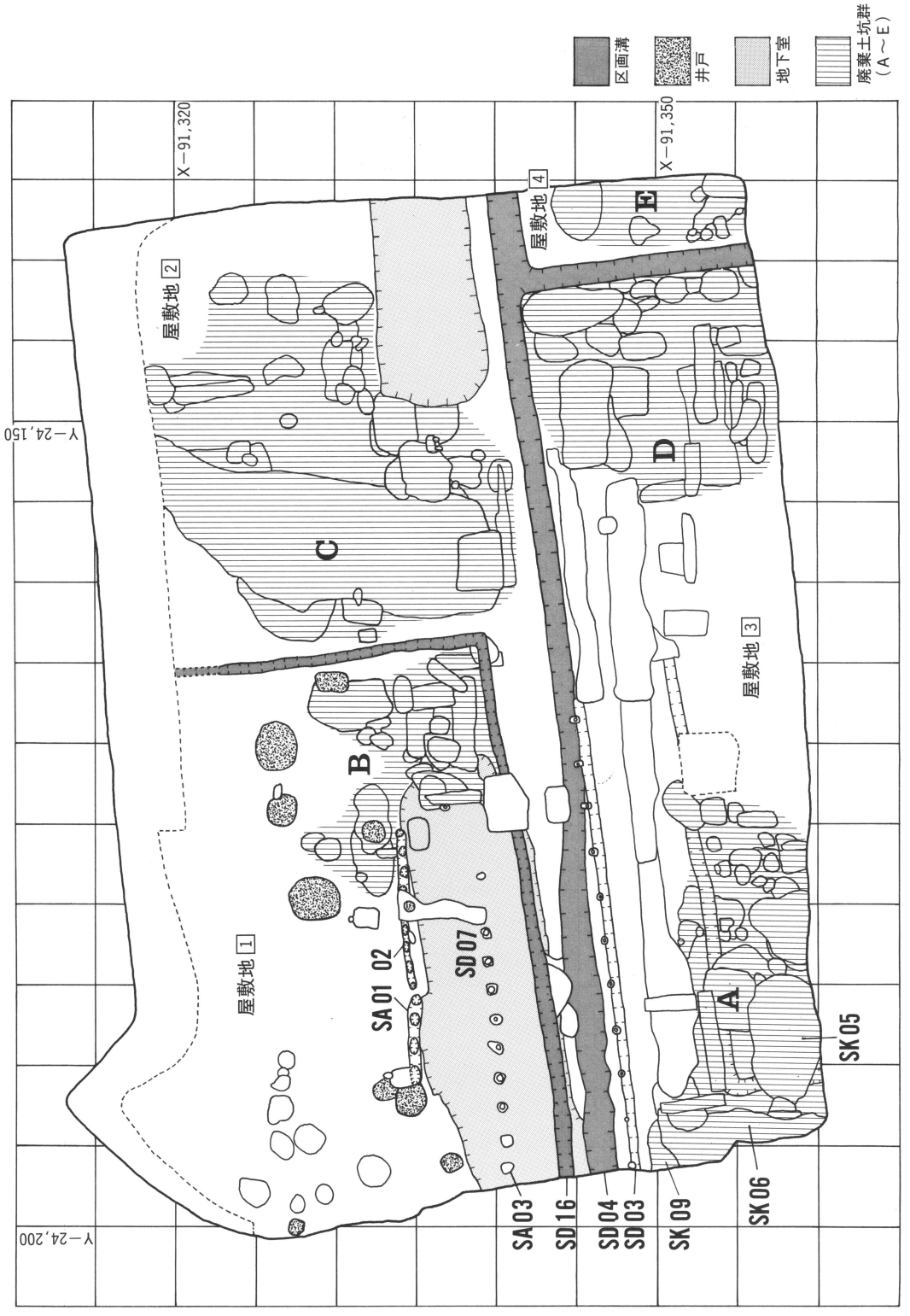
地下室は、屋敷地1内に幅8m、長さ25m以上・深さ3m以上の東西方向に細長い形態のもの（ＳＤ07）が確認されている。北肩には、幅1.5m程の


調査区全景（北から）

ＳＤ04（中央・東から）

廃棄土坑群Ｂ（北から）

ＳＤ07セクション（東から）


区画溝
井戸
地下室
廃棄土坑群
（A～E）
X－91,320
X－91,350
Y－24,150
Y－24,200
屋敷地 1
屋敷地 2
屋敷地 3
屋敷地 4
A
B
C
D
E
SA 01 02
SD 07
SA 03
SD 16
SD 04
SD 03
SK 09
SK 06
SK 05

第３図　主要遺構図（Ⅳ期）

テラス状の張り出し部分、及びそこから降りる地山を削り出した階段が付随している。地下室内の詳細な構造や上屋の存否については不明である。

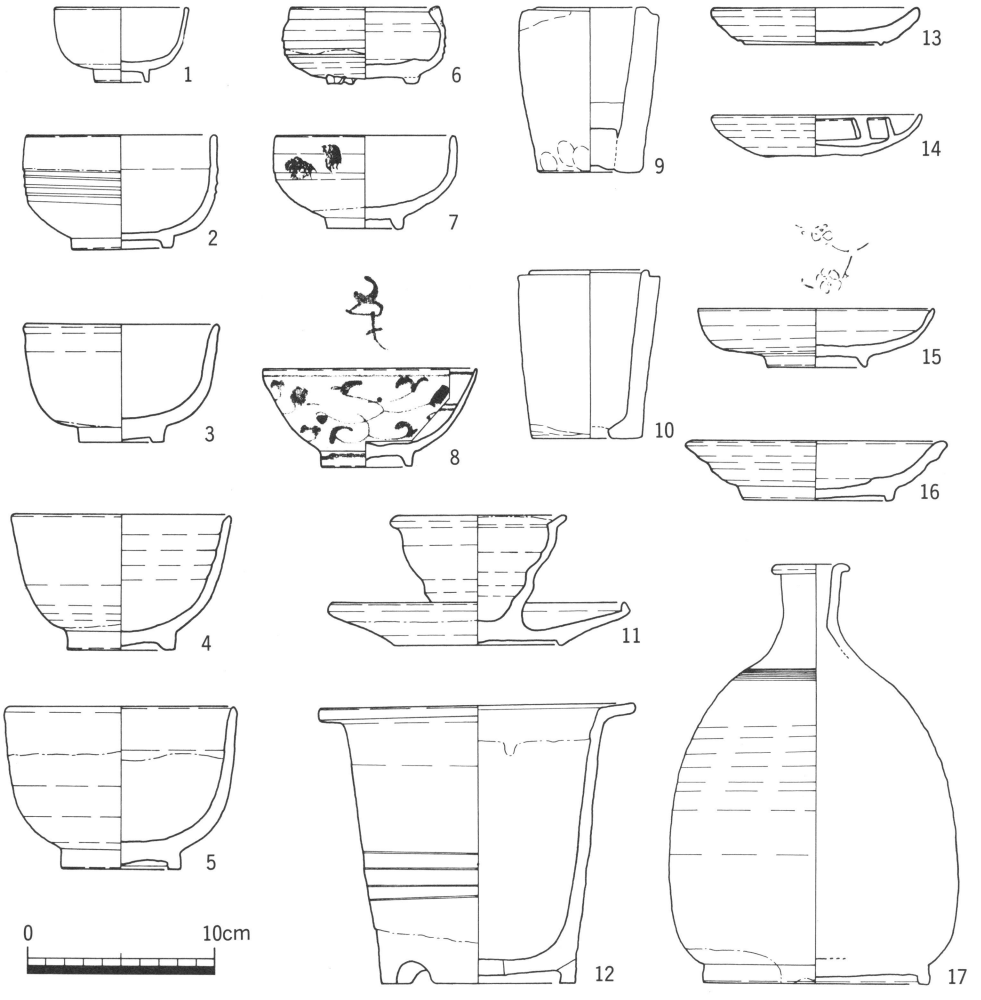
井戸は、その大半が屋敷地1内で確認されているが、この部分は屋敷の南東部分にあたることから、周囲から出土している埋甕と伴に、屋敷地内における井戸、及びその関連施設の分布を知る手掛りとなり得るものであろう。井戸枠等の内部施設については、台地上で井戸が深いこともあり、確認していない。

また、屋敷地3のように、廃棄土坑群（A・D）の間に、非常に遺構の少ない部分が一定範囲広がることは留意すべき事実であり、ここには、礎石建物や庭の存在が想定される。

さて、以上、主な遺構を性格ごとに概観してきたわけだが、今回、図示した以外にも、境界溝や地下室と考えられるものがいくつか存在する。それらを含め、遺構の変遷やセット関係の解明、出土遺物の分析が望まれるところである。そして、そこから導き出される遺構のあり方は、屋敷地内の空間利用のパターンを考える上で重要なデータとなり得るのであり、一昨年度の調査成果も合わせて、今後検討を加える必要があろう。

遺物　遺物は、Ⅳ期のものだけでコンテナに約540箱出土しており、その大部分は陶磁器である。その内容は、最も多量に出土する椀、皿、擂鉢、灯明具等の生活雑器から、人形、雛・飯事道具などの嗜好品に至るまで、実に多種多様である。これらの陶磁器は、大半が18世紀中頃から19世紀前半に含まれるものであるが、17世紀のものも少量ながら出土している。産地は、瀬戸・美濃産のものが最も多く、肥前陶磁や京焼等がそれに次ぎ、輸入陶磁も若干含まれている。また、廃棄土坑群Cの中には、土器の皿や鍋と伴に、獣骨や貝がらを多量に含む遺構も見られた。その他、キセル、銭貨、釘等の金属製品、硯、砥石、石塔等の石製品、かんざし等のガラス製品、漆椀等の木製品など、当時の生活を髣髴とさせる遺物も多量に出土している。

1は灰釉を施した小椀、2はいわゆる「腰錆」といわれる灰釉と錆釉を掛け分けた筒形椀、3は灰釉、4は長石釉を施した丸椀、5は口縁周辺にうのふ釉が施されたいわゆる「尾呂茶椀」である。6は緑釉が掛った香炉、7は京焼の煎じ茶椀で、外面に鉄釉で文様が描かれる。8は外面に呉須で唐草文が描かれた磁器椀で輸入陶磁の可能性が高い。9、10は焼塩壷で、蓋受け部が痕跡程度に退化している。11は全面に鉄釉を施した灯明具、12は灰釉の掛った植木鉢で、土坑中に4個体並べ据え置かれた状態で出土した。13は長石釉の皿で、高台はかなり退化している。14は鉄釉を全面に施した灯明受皿、15は内部底面に摺絵のある灰釉の皿、16は長石釉を施した輪剝げの皿である。17は鉄釉を施した徳利である。これらの遺物は、SK09のものが17世紀前半と考えられる他は、全て18世紀後半以降のものということができよう。　（金子健一）



第４図　Ⅳ期の遺物（１、２、７、９、10、15、17はＳＫ05、５、６、13はＳＫ06、４、11、16はＳＫ09、12はＳＫ100、３、８、14はＳＤ07）

ＳＫ89（手前）・ＳＫ100植木鉢出土状態

ＳＤ07漆椀出土状態